

蓮華座の展開についての考察

——「舎衛城の神変」説話から——

杉 本 瑞 帆

仏陀の蓮華の座所について、先行研究では発達した大乘經典を主とし、単独流布した經典には着目されてこなかった。蓮華座湧出を説く「舎衛城の神変」を有する經典を中心に整理、考察する。

まず、蓮華＝聖者の比喻が仏陀において図像化されたと思われるものが、初期仏教美術（B.C. 2 C 末～A.D. 1 C 初）サーンチー塔門に在り、ここではまだ仏陀の蓮華座は表されていないことが確認できる。

次に「舎衛城の神変」を物語る18の經典を三系統に大別した。〈A グループ〉（Jātaka. No. 483. 等 3 經）神通の安易な使用の禁止、マンゴー樹急成長の神変、双神変が示されるが、蓮華の座所は登場しない。〈B グループ〉（『義足經』（T. No. 198）Dīvyāvadāna（Cowell. pp. 143-160）等 9 經）化仏湧出が現され、2 經を除いて蓮華座が登場する。〈C グループ〉（『仏所行讃』等 6 經）神変が仏伝の一事件として簡易に扱われるもの。

B グループの最古訳『義足經』は神変場面に蓮華座が描かれる。同經を南清隆 [1986] は有部系に近いと指摘する。また Divy と類似した叙述が、Anavatapta-gāthā にも確認できる。MSV では舎衛城での神変とアナヴァタプタでの前世想起は、仏陀の十事として重要視されていた。先行研究で用いられてきた Divy の表現には、有部と近い傳承の中で、特に因縁譚との繋がりがみられる。

大乘經典での導入について、桜部建 [1969]、大竹晋 [2007] は「舎衛城の神変」と〈華嚴經〉の「仏華嚴」（Buddhāvataṃsaka）との近似性を指

摘する。〈華嚴經〉各品は『兜沙經』が原始華嚴經として成立してのち、『本業經』が成立している。化仏の創出はこの『兜沙經』(T10. 446b)『本業經』(T10. 447b)にすでに表れている。しかし蓮華上の師子座と別個の場面で採用されており、原始華嚴經では蓮華を用いた Buddhāvataṃsaka はない。一方、「舎衛城の神変」Bグループはその訳出年代から原始華嚴經の Buddhāvataṃsaka を取り入れたものであり、その後の大本『華嚴經』の蓮華を用いた Buddhāvataṃsaka は「舎衛城の神変」を逆に取り込んだものである。

化仏湧出と蓮華座の発達は、A. D. 2 C 後半頃には仏教徒の間に知られ〈華嚴經〉と因縁譚で相互に影響を与えつつ発達したと思われる。

(龍谷大学 仏教学 研究生)